７月 テーマ：戦争から命の大切さを学ぼう

講師の酒井さんは、１１歳の時、名古屋空襲を体験されました。その時の体験を通して、命の大切さについて考えるお話をしていただきました。

戦争中の食生活や焼夷弾（しょういだん）の怖ろしさ、戦争は心をまずしくするだけの何の価値もないことであることなどを、体験をもとにくわしく話していただきました。その体験を通して、家族の大切さや命の大切さを知り、戦争のことを後の世代に伝えていくことの大切さを感じられたそうです。

酒井さんが一番伝えたかったことは「命の大切さ」です。家族にもらった命を大切にするということは、「命がある私たちが何をするか考えること」「命のねうち（大切さ）を考えること」「自分で自分の命を守ること」「生きていく楽しみを見つけること」と教えていただきました。

話の始めに「自分は好きですか。」と酒井先生から問いかけがありました。その問いかけに、自信をもって「はい。」と答えられるような自分になっていけるとよいと思います。

このお話を聞いて、命の大切さを感じ、これからの自分の生き方を見つめて感想を書いている人が多くいました。

みんなの感想

いのちをたいせつにしようとおもいました。ともだちにいやなことをしないようにします。いやなこともいわないようにします。
（１ねん１くみ　男児）

じぶんのいのちをまもろうとおもいました。おともだちとなかよくしたいとおもいました。　（１ねん１くみ　女児）

じぶんのいのちはじぶんでまもるっていうことがわかりました。せんそうはやってはいけないことだとおもいました。
（１ねん２くみ　男児）

いまぼくたちのところにせんそうがあったら、いまじぶんのともだちといっしょにあそべなかったとおもいます。せんそうがなかったほうがよかった。
（１ねん２くみ　男児）

わたしは、さかい先生の話を聞いて、いのちの大切さを知りました。せんそうはよくないと思います。わたしは、せんそうということばを聞くと、すこしおこりたくなります。友達の大切さも命の大切さと同じだと思いました。

（２ねん１くみ　女児）

わたしは、さかいひろこ先生の話を聞いて、１１さいのときにせんそうがはじまったことがわかり、こわかったです。みんなひとりひとりいのちを大切にしなきゃいけないと思いました。ごはんが１週間で１合と小さなおいもが３こだけなんて、かわいそうでした。だから、いのちは大切だなと思いました。だから、せんそうはやっちゃだめだと思いました。

（２ねん２くみ　女児）

ぼくは、酒井先生の話を聞いて、お母さんがどんなにきびしくてもお母さんを大切にしなきゃと思いました。ぼくは、今の生活がふつうだと今まで思っていたけど、今の生活がとてもありがたいということがわかりました。

（３年１組　男児）

わたしは、酒井先生の話を聞いて、ひこうきからばくだんがふってくるから、せんそうはこわいなと思いました。ひこうきの音がものすごく大きいことがわかりました。たくさんの人がばくだんでけがしたりいなくなったりするから、せんそうはこわいなと思いました。

（３年１組　女児）

ぼくは、酒井先生の話を聞いて思ったことは、昔は今よりすごくこわいと知らなかったので勉強になりました。おどろいたのは、米が１週間に１合ほどで、これを３、４人で分けないといけないので、とてもぼくたちにはできません。ぼくは、この平和な世界に生まれてよかったと思っています。ぼくにはおかあさんがいるけど、昔はばくだんでお母さんをうしなった人たちもいるかもしれません。ぼくは、家でも学校でもなまけているので、これからは、学校でも家でも勉強したいと思いました。

（４年１組　女児）

わたしは、お話を聞いて、せんそうはこわいことをあらためて感じました。お話の中ではぞっとするお話もありました。足がへこんで、イソジンみたいなので手当てをしたけど、うんで、お母さんがそれを手当てしてくれたそうです。家からたたみのような物を持っていって、防空ごうをしめたそうです。工場で働けばごはんがもらえたから、そこで働いていたそうです。友達がうたれたら、みんなで手当てをしていたそうです。せんそうはこわいので、やっている国はやめてほしいです。

（４年２組　女児）

酒井弘子先生の話を聞いてせんそうはこわいと思いました。せんそうはせめられている国だけでなく、せめている国の人もかなしくなるので、二度と起こしてはいけないものだと思います。せんそうの配給の食料はいっぱいもらえると思っていたら、大まちがいでほんの少しだったのでびっくりしました。弘子先生のお母さんは本当にりっぱなことを言っているなと思いました。

（５年１組　男児）

私は酒井先生の話を聞いて、戦そうはしてはいけないなと思いました。私はいつも文句を言ったりしています。でも、そんな事は言ってはいけないなと思いました。一家の一週間分の食料はお米一合というとても少ないものでびっくりしました。だから、好き嫌いを言ってはいけないなと思いました。酒井さんのお母さんは酒井さんに「弱い者いじめはだめ。」ということを言っていたそうです。その時代は弱い者いじめはだめなどというような時代ではなかったと思うので、酒井さんのお母さんはすごいなと思いました。「パラシュートでおりてきた外国の兵隊の人はかわいそう。」と酒井さんのお母さんは言っていたそうですが、その時の私はきっとそんな風に思わなかったと思います。私は日本という国を戦争のないいい国にしたいです。

（５年２組　女児）

差別や争いは、人の心を貧しくするから、絶対にしたくないと思いました。そして、どんなに小さなことでも、悪いことをすると戦争につながるということを、あらためて感じました。戦争をして幸せになる人なんてだれ一人いない。ただ心をみにくくさせてしまうだけです。今、私たちがふつうに家族といて、ふつうに友達と学校にいる。その「ふつう」が一番幸せで、なくしてはならない大切なものだと気づきました。自分がこんな生活にいることがどれだけ幸せなことか感じながら、そして、「ふつう」をなくさないように、今日から生きていきたいです。

（６年１組　堀　きらり）

酒井弘子先生が教えてくれたことの中に、戦争のこともあったけど、命の大切さもありました。初めに「自分のことが好きですか。」と聞かれたときに私はすぐに「はい。」と言えませんでした。でも、酒井先生が言われた「自分が好きじゃない人が、人を好きにはなれない。」という言葉で、常に自分が好きということは大切なんだなと思いました。そして、酒井先生が経験した戦争は、人の命をうばうだけでなく、人の心をまずしくするということは、すごく悲しいことなんだなと思いました。酒井先生が「戦争のおそろしさを伝えたい。」とおっしゃったことがしっかり伝わってきました。

（６年２組　女児）